



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年  
10月号  
通巻458号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

発行日 平成20年10月23日  
発行所 大倭出版局  
〒631 0042 奈良市大倭町1の12  
電話 (0742) 44 0015  
印刷 大倭印刷株式会社  
定価 1部 250円  
年間購読料 3,000円(送料共)  
振替口座 01050 6 67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



御輿来(おこしき)海岸干潟、前方は島原雲仙岳 奈良市 和田 保さん撮影(文・6頁)

昭和38(1963)年10月23日 月次祭法話より

# 昭和維新の比登柱

法主 矢追 日聖 (満51歳)

今日は、まことに結構な秋晴れのお天  
気でございます。だんだんと秋も深くな  
ってきまして、周囲の木々の葉もだいぶ  
紅葉してまいりました。  
今日は十月の月次祭ですが、十という  
数字は次にまた一、二と戻るところで、  
最高、頂上ということでございます。

私の母のこと、子供のことも

まあ、大倭の姿もぼつぼつ変わりつつ  
あるんですが、今日、私の母親の隠居す  
る小さい住まいの棟上げをやっておるん  
です。大工に今日にしてくれと頼んだわ  
けじゃないんですけれども、ちょうど都  
合で、今日になりました。

私の母も七十七歳、喜寿になるんです  
が、晩年に大倭の大本宮に入ることにな  
りまして、まあこれも、霊界の方の動き  
が、こうなってきたんだろうと思うん  
です。

私の母も、いろいろな役目、自分の使  
命を持ってこの世に生まれたんですが、  
人間的な修行、自分個人の修行というも  
のは、どうやら一応終わったらしいん  
です。それで、とうとう年内に大倭に移る  
ことになったわけなんです。私としても、  
非常にめでたいことだと思っております。

母には母の役目が残っておると思いま  
すが、これから先はどういうように動い  
てゆくのか、私には分かりません。一方  
私の場合は、これから自分の本当の仕事、  
自分の使命に向かって出発する時に当た

つているんです。

ちようど、親子が入れ替わるような形になるんです。そこにどういような因果関係があるのか、これは神様の計画のしからしむところで、我々には未知の世界です。だから、かえってそれがまた、楽しみでもあるんです。

今日の月次祭は、そんな意味において、何かしらうれしいような感じもいたすんでございます。そしてもうひとつ、これは皆さんに披露する必要はないんですけども、これも大倭の動きのひとつですから、お話だけは申し上げておきます。私の子供もどうやら二十六という年になりました、今月の二十九日に結婚式を挙げるということになりました。

これまで私は、宗教の方もやっていかなければならない、たくさんある家族の生活の問題、その他いろいろなことにも気を配っていかなければならぬと、両刀遣いのような形でまいりました。それでは、自分の気持ちに添った宗教活動というのは、事実上、不可能だったんですね。

しかしこの度、子供が嫁をもらって、家の中のこと、大倭のいろいろな事業のことなどをやってくれるということになると、それらは子供に一切まかせて、私は霊界のご指示通り、翼を広げて十二分に自分のお役目ができる。過去世の因縁によって前の世から持ってきた仕事を、今世においてこれからやっていく。五十歳を過ぎ白髪となってから、出発することになった次第です。神様がそういうようにして下さった。これは非常にありがたいことだと思っております。

## 街頭布教からの出発

大倭教は、昭和二十年の終戦の日に、神様から

のご宣託によって出発しました。大倭という名称を使い、大倭の教えとして出発せよというのも、霊界からのご宣託だったんです。

最初に街頭布教に立って、そう霊界から示されました。そんなもん、経験も何もなかったんですけども、大阪の街に立ちまして、まるで乞食坊主みたいに大きな声で怒鳴りました。

……日本は武力では負けた。けれども、日本の国自身が滅んだのではない。日本がなくなつたのではない。霊界から見れば、負けて悲観する必要もない。勝って威張る必要もない。これは、人の世の移り変わりの姿に過ぎない。日本には昔から神様の心が流れている。……

敗戦直後、宗教は地に落ち、混沌とした不安定な時代でした。そんな中で、白い着物姿で大阪のど真ん中に立って、神ながらの道を辻説法したわけですからね、気が扱い扱いました。進駐軍に検束されかけたことも何回もあります。私自身がMP（米軍警察）の本部へ参って、日本の宗教はこうなんだと説明したこともありました。

霊界からの指示が、まず布教に立ってということでしたから、信者のような者が出来ようが出来まいが、世間の人々が気がいと言おうが何と言おうが、おかまいなしだったんです。

あの終戦の年から今年で十八年になります、まあその間の歩みは、自分に恥じるところはあります。神様の心の通りに、神意の通りに、今日までだいたい間違いない歩んでこれた。それだけは自信を持って言えるんです。

人間的な自分から言うと、うぬぼれになりますけれど、本当に強い信念がなければ、神意を日々の生活の中で実行するというのは、むずかしいことでもあるんです。幸いにして自分は、何とかその道を歩んでこれた。このことに対して私は、非

常に喜びを持っているんです。

その終戦の時に、霊界の方では、今後ほぼ二十年後とおっしゃったんですね。霊界のことですから、的確にはおっしゃらない。漠然たる示し方ですけれど、だいたいその頃に、やらなければならぬ時が来るんだということでした。私はいくつでしたかね、勘定すれば三十五、六の年ですから、ずいぶん長いようにも思っただんですが、終戦の年から二十年待ってから、大倭の宗教は本当に活躍しなければいけないんだ、ということでした。

## 「黎明大倭」の霊示

「黎明大倭」の歌詞は、大阪に街頭布教に出ていたころに、生駒トンネルの中で生まれました。

街頭布教では、飯もろくすっぽ食わずに朝から晩まで怒鳴り散らしているんですから、身体はもうくてんくてんでした。帰りは近鉄の上六（上本町六丁目駅）から乗って、富雄駅まで来て、そこから家まで歩いて帰るんですが、生駒のトンネルに差しかかると、霊界からのリズムが聞こえてくるんですね。

電車の音がコトコト耳に入ってくる。隣には人もいる。けどまあ、疲れ切っていますから、目は閉じて、半ばうつつの状態です。言い換えたら、意識と無意識の中間意識といった状態で、はたから見れば、半分眠ったような状態に見えとつたと思っんです。

そういうような状態の時に、このトンネルの中で、一節の「黎明告ぐる」という言葉が出てくる。鶏が出てきてね、天の岩戸のような場所が見えてくる。

黎明告ぐる暁の

鶏の鳴く音にふるひ立つ  
大倭の神の子は  
平和の使い世の力

と、声で聞こえてくるんです。だんだんに夜が明けてきて、暁の鶏が時を歌う。暗黒の日本が明るくなっていく姿が霊界で見えるんです。その中から、声が聞こえてくるんですね。

それで私は、居眠り半分の意識の中で手帳を出して、その言葉をメモしておいたんです。だからあの歌は、私が作詞したのではなく、霊界から聞こえてくるのをそのまま写しただけです。霊界の誰かが、ああいう歌を口ずさんでおったんだと思うんです。

こうして、「黎明大倭」の一節は生まれました。続けて二節、三節、四節と、生駒のトンネルの中の霊示でした。一日に一節、それも続けてではなかった。私が今日はあるかしらと思っただけでも出てこない。霊界の指図ですからね、どんなふうに出てくるかは、私にも分からないんです。

## 第五節 昭和維新の比登柱<sup>ひとばしら</sup>

いちばん最後の五節ね、あれはトンネルではありませんでした。私、霊界の方に聞いてみたんです。もうこれで終わりなのか、五節はないんかと言っただけ。

最後の五節が出たのは、大倭の大祭の時でした。いつ頃でしたかお忘れしましたが、十二月二十三日でしたか、神さんにお参りした時に、それが出てきたんですね。

常夜のときばり明けそめて  
神機は熟す秋<sup>とま</sup>はいま

大倭の神の子は  
昭和維新の比登柱

言うてみたら、そもものすごい内容ですよ。だから、電車の中とか道とかではうかつには出てこられない内容なんですね。昭和維新の比登柱、これは言葉とすれば、非常に険がある。流血革命のようなね。ところが霊界からはそういう言葉で出てくるんです。

歴史の中では、革命とか維新と言うと、みな血を流している。しかし大倭で言う昭和維新とは、この大倭が立つことよって起こりうるこのころの宗教改革という意味なんです。霊界の言う昭和維新とは、暴力や流血は無縁です。

私は昭和維新の比登柱となる。もちろん、その自覚というものは持っておりません。けれども、絶対に血を流さず、争いも起こさない、そういう昭和維新というものが、本当に実現するものかどうか、神さんに質問したことがあるんです。そして神さん、これは可能だとおっしゃるんです。大倭の昭和維新とは、血を見るような、そんな残酷な革命じゃないんだ。大倭の昭和維新とは、この常夜のときばり明けそめてくるようなものなんだ。

世の中にゆがんだ宗教があるのと、神意に添わない宗教があるのと、神意に添った真の宗教を素直に世の中に出していけば、争わずして、おのずから、それらの宗教は姿を消していくと、こうおっしゃるんです。

注 「ひとばしら」というのは霊界のことなんです。

「とま」とは我々現界のことなんです。だから霊界と現界とをひとつにして、そのためにもやるといふことなんです。『なががそねの息吹』295頁より

## 神意のままに

霊界の方からは、無計画の計画、無統制の統制があると云ってきます。人間が計画しなくとも、霊界の方ではちゃんと計画し、統制している、そういう意味なんですね。こうした言葉の味を良く体得せよと、私は昔から言われてきました。何百年、何千年、何万年からの霊界の仕組み、霊界の計画、その神意のままに大倭の宗教は動いていく。

だから私は、自分の頭は使わなくていい。宗派、教派も作らない。信者を増やすための積極的活動もしない。焦らないし、私から人を求めることもしない。

霊界から見ると、昭和の現代は期待されている時代らしい。そういう霊界の計画の中で、この昭和の四十年ごろになってまいりますと、日本だけでなく世界各国に、大倭と歩調を合わせるような生き方の人、同じ意見の人、同じ宿命の人、同じ使命の人が、ぼつぼつと生まれておるはずなんです。そういう人々とのあいだに何らかの肉体的な関係が生まれ、結びつく機会も出てくる。

私自身は霊界から、私が口にするのと非常にうぬぼれた言い方ですが、おまえひとりだぞ、おまえひとりだぞと昭和維新をやり抜くんだぞと激励されています。それぐらいの強い信念を持って進んで行けと言われている。自分以外にはいない、自分がやらなければ誰がやるんだ、という覚悟を持って歩めと言われている。

私はこれを天狗になって言うのではありませんから、霊界の計画にしたがい、同じ使命の人と大倭のあいだに肉体的な結びつきが生まれてくれれば、なおさらけっこうなことなんです。

この昭和四十年を機に、神意は具体的に動く。霊界の計画にしたがい、その時機が来れば、そういう人々と大倭のあいだに連絡をつけて下さる。私はそう信じている。

私は神意のままに昭和維新の比登柱として生きる。大倭はあくまでも、霊界の計画のままに、神意のままに、神様の心に添っていく。みなさんも、その使命の一端を担っている。そういう気持ちをもって、信仰をつづけていってほしいと希望するんです。

(文責・編集部)

## 特集 私と戦争 (下)

### 模擬原子爆弾

奈良市 兼田 隆

太平洋戦争末期の1945年(昭和20年)7月から8月にかけて、模擬原子爆弾(通称パンブキン爆弾)が東京・富山・長岡・大阪など主要都市49の地域に投下され、各地に大きな被害をもたらしました。この一連の空襲は原子爆弾の投下を成功させる為の特別な訓練でもありました。

1945年7月26日午前9時26分、大阪市東住吉区田辺にも、この模擬原子爆弾の空襲



があり、7名の犠牲者と建物に被害をもたらします。現在、この地にその時の犠牲者のご息の方が建立した碑があります。犠牲者の冥福と世界平和の文面

が碑には記載されています。(写真)

11日後の8月6日午前8時15分、B29エノラ・ゲイにより広島に原子爆弾が投下され、3日後の8月9日午前11時02分には長崎にも投下されます。現在までの被害者数は広島40万人、長崎20万人とも言われ、今年で63回目の平和式典を迎えました。戦争の代償はあまりにも大きい犠牲を払う事を我々は忘れてはなりません。

### 僕と戦争について

あじさい邑 中島 武宣

私は太平洋戦争に行っていない(当たり前ですが)。戦争について知っていることは、テレビや教育で得た程度と、榊義じいさん(母方の祖父)から聞いた体験談くらいです。

榊義じいさんは戦争の事を話す時は、必ず興奮します。どうも頭の中で当時にフィードバックするようです。(笑)

じいさんの戦争話にはキレイな話は一切ありません。えげつない話ばかりです。

上等兵の隊長に呼び出されて何回も殴られたとか、食べる物はほとんど無く、蛇や幼虫はご馳走だった。三日以上食べないこともあるとか。じい

さんが戦争話を誇らしげに語る姿に、「日本男児の根性美学」を感じていました。

榊義さん二十歳 出征時



また、僕の父方のじいさんは、戦争から帰ってきてすぐに亡くなっています。だから、写真でしか顔を見ることがなく、どんな人だったのか、と想像するしかありません。

僕は今年で34歳になりました。じいさん達が戦争に行った年齢を超えました。

小学生の頃には「戦争はしょうがなく起こるものだ」と思っていました。しかし、今はっきりと言えるのは「戦争は人間のエゴで引き起こすものだ」ということです。

僕はそろそろ次の世代に伝えて行く年齢になりました。同じ過ちを犯さないための「継承」は必要だと感じています。

紫陽花邑では、しばしば榊義さんの戦争の話や断片的に耳にしたものです。昨年の「特集私と戦争」で、この際、孫の武宣君にじっくりと聞き書きをしてもらうはずでした。榊義さんは、杉本順一さんに「一緒に聞いてほしい」と言いに来るなど、気合い十分でしたが、実現する前に少し介護の必要な状態になっていました。今は回復中ですが、とりあえずこのような形でものと書いてもらいました。

(編集部)

# ワークキャンプに参加して感じたこと

## —中国ハンセン病快復村にて

F I W C 関西委員会委員長 藤田 美由紀

F I W C 関西委員会に所属し始めたのは、今から一年前の大学三年次の夏でした。一年間の留学から帰国し、元々興味のあった異文化交流を更に深めたいと思っていたときに出会ったのが、「中国ハンセン病快復村」でのワークキャンプでした。

当初、私のハンセン病に対する知識はすくなく手薄なものでした。参加を決意しようとした頃、家族や祖母に「中国のハンセン病快復者が暮らす村に行ってボランティアをしようと思ってるねん。その村、山奥にあつて水道もないところみたい」と、淡々と話していました。

すると母親から「病気の症状で顔や手が変形してるんよ。そんなところで活動できるの?」と聞かれた時のゾツと襲い掛かった不安感は衝撃でした。それまでは、「異文化交流ができる」「変わった経験ができる」「英語も使える」と自分に都合のいいイメージだけ膨ら



た経験ができる」「英語も使える」と自分に都合のいいイメージだけ膨ら

ませていただけだったのです。

中国へ発つ前、岡山県にあるハンセン病療養所愛生園を訪問しました。快復者の方と初めて顔を合わす。ガチガチに緊張し、ドキドキと鼓動が高鳴っていたことを今でもはっきりと覚えています。初めてのご挨拶。どれだけ私の笑顔がひきつっていたのか……。しかし、会話をする中で、勝手に縛っていた「ハンセン病快復者」という枠が、どんどん取り外されていくのを感じました。

中国で、私が訪れたハンセン病快復村は、湖南省（中国南東部）に位置し村人18名が暮らす小さな村でした。訪問の目的は、水道建設。高齢化が進み、手足に後遺症を残した村人が毎日10分程山を下ったところまで水を汲みに行かなければならないというのが、その村の深刻な問題でした。水道建設という慣れないワーク（穴掘り、膨大な量のレンガ、セメント運び、水道管つなぎなど）に加え、炎天下での作業は精神的にも体力的にも大変な苦勞を伴いました。しかし、日本、中国の壁を崩し、仲間と歌を歌い、ゲームを交え、「ワーク完成」という一つの目標に向かって、みんなで取り組む中で、しんどさから楽しさに変わっていききました。私たちの取り組みを見て感化された、

足のないおじいちゃんや手の不自由な村人、人見知りをしてなかなか近づいてきてくれなかった村の子も手助けしてくれるようになり、すごく元気をもらうことができました。同じ労働を通じ、共に汗を流した仲間、村人との間には、「言葉」なんて必要ではなく、自然と兄弟、家族のように打ち解け合えることができたのも事実です。

結局、去年の水道建設は、期間内に成功させることは出来ませんでした。しかし、今夏も同じ村へ行き取り組み、一年越しに水を村へ届けることができました。

村人「ありがとう。この村に水道が通るなんて考えもしていなかったよ」。村人は、私たちに「謝謝、謝謝」と言い続けました。「でもね、本当は、私たちがこそありがとうという気持ちでいっぱいなんだよ。村人の優しさに支えられ、この経験をを通して、人との繋がりの深さを改めて感じる事ができた。本当にありがとう」

人と人との関係を生み出すとき、差別も偏見も、性別も年齢も、国も文化も、なにも関係ないと感じています。ただ、「差別・偏見」というのは、その人自身の今までの人生経験全てが影響し生まれる為、現在よりも「ハンセン病」に対する差別を色濃く生きた時代の人たちにとっては簡単に差別意識を一変させるのはとても難しいと思います。現在も、私の祖母は「ハンセン病」に対する偏見を強く持つっており、私の活動を理解してくれていません。しかし、そんな「差別・偏見」意識を改める機会を与えてくれる活動こそ、「生の交流」の場をもてるこのワークキャンプだと感じています。やはり、実際に生で感じる感情（心）こそ、その人の考え方を左右しているのではないかと感じています。誰もが経験出来るわけでない、こうした貴重な活動に参加している私たちだからこそ、感じたことをただ留めるのではなく、外へと発していきたいと思えます。いつか、祖母が私の成長をみて、「中国の村ですごく恵まれた経験をしているのね」と言ってくれるように、私が、中国ハンセン病快復村のおじいちゃん、おばあちゃん、日本の実の祖母を結ぶ架け橋となれることができればいい……。 (神戸女学院大学)

# 風くるま

## 『森からきた便り』

名古屋市 村木 哲

拝啓

挨拶は、省きます……。 たったひとつのお願い……

もう放うつといてほしいんです……もう入って来ないでほしいんです……なんだかんだ云いながら、あんたらは入ってくる、もうほんとにかなわんわ、勘弁してほしいわ。

あんたらの云い分はきまってる……調査や研究や、保護やなんて云いながら入ってきよる……厚かましいにもほどがある……なんのための、誰のための調査や？研究や？保護や？

あんたら、どやどやつと横柄に、わしらの所へ入って来て、乱暴ろつぜきしたい放だいで……わしらを殺し、捕まえ見世物にしていたぶり動物園監獄に無期刑で幽閉し……考えてもみいや、わしらの罪も犯しとらせんのやでえ……わしらの森の王国で静かに暮らしたっただけや。

それに、あんたらは、この森の王国の木をやたら切り倒し放火し、神から与えられしこの神聖な森を犯しつづけた。

挙げ句の果てにや、あんたらは、わしらのことをEndangered Species（絶滅危惧種）などと名付け、今度は保護せないかん、保護せんと滅びてしまうなんて叫びだした……あほらしてあほらして話にもなんにもならせん。

あんたらは、わしらを見下しているんや、わしらの気持ちをおかかってへんのや……殺し殺し、滅

びかけたら保護する……と、ええ加減にせいや……あんたらはわしらのことを類人猿などと勝手に命名しておるが、そんならあんたらは類人猿やないか……遺伝子かてあんたらとわしらと殆どおんなじや……わしらは同等の生きものやでえ……ちよつとだけ地球で生きるお役目が違うだけや……わしらは神の御意志に添うて生きてきた、ところがあんたらは神を冒とくしつづけて生きてきた、ひどいもんや……あんたらは、偉そくに人類の叡智<sup>ひんち</sup>などとぬかしおつたが、その叡智とやらをいつどこへ捨てて来てしもたんや。

あんたらは地球に生きる仲間達（生きもの）の尊厳を踏んで踏んで踏みにして生きて来た……あんたら胸に手当ててよう考えてみてくれや。

そんなあんたらの保護なんてものを喜んで受け入れられると思ukaiい？ あんたらが一生懸命頼んできたらまた話しは別や、どうか保護を受けて下さいと一生懸命頼んで来たらまた別や……でもそんな兆しは見られへんなあ。

わしらはわしらで生きてゆく……森の王国は狭くなり仲間達も随分減ってしまったけど、わしらはわしらで生きてゆく……あんたらはあんたらで問題を山程かかえ込んでいるのやさかいに、その解決に努力して欲しい……森へ入って来ないで欲しい、保護などしないで欲しい。

わしらは滅びるかも知れん……でもでもそれが神の御意志なら喜んで受け入れよう……それが滅びの美学つちゆうもんや。

なんもあんたらを批判、非難するつもりなんかないよ、ただありのままを述べただけよ……あんたら、すること一杯あるやないか……大勢の家族がアフリカやあちこちで飢えとるやないか、家族同士で殺し合いやつてるやないか……すること一杯あるやないか。

わしらのことは、放うつといて欲しい……なんもしてほしゅうない、入ってこんで欲しい、放うつといて欲しい。

わしらは森の王国の奥で、あんたらの幸せ祈つとるよ。そしていつかおんなじ仲間としてあんたらと仲ようつき合える日の来ることを願つとるよ。それまで さようなら。

類人猿のあんたらへ、  
類人猿のわしらから。

（追伸1）  
放うつといて欲しいと云ったけど、なんもせんて欲しい……って云うとるんやないよ。森のこと、密猟のこと、など……でも、それらはあんたらの問題でわしらの問題ではないよ……ここんとこ大事なことやで間違えんといてな、混同せんといてな。

（追伸2）  
云いたいこと、しゃべくりあいたいことは山程ある、（追伸100）まで書いてもまだ足らん……でも、でももうお別れしよな……きりないもんや。

### 表紙写真について

御輿来海岸（熊本県宇土市）は、「景行天皇があまり景色が良いのでお輿を停められた」という伝説のある所です」と和田保さんは言われ、FAXして下さった資料には、有明海は干満の差が大きく、最干潮時にはまるで彫刻のような雄大な砂の曲線が現れるとありました。

景行天皇は大和朝廷勃興期の第12代天皇。九州へも親征したと伝えられます。山の辺の道近くの御陵には大倭会文化行事で行っています。ヤマトタケルノミコトはこの天皇の皇子。（編集部）

## こだまことだま

'08・9・15

東京都 矢部 顕

この夏、1ヶ月、ペンシルバニア州の草深い田舎で暮らしました。3年連続です。滞在したあたりにはアーミツシユの人たちもたくさん住んでいて、馬車が行き交うランカスター地方の田舎の小さな村でした。

ペンシルバニアという名前は、「ペン」と「シルバニア」できていて、ペンはクエーカーの偉大な指導者ウイリアム・ペンから由来し、シルバニアは森という意味です。ペンの森です。

州のどこにいても森のなかに村があり町がある感じがします。高速道路以外は、フラットな道やストリートな道はまったくありません。曲がりくねっていて、アツブダウンの連続で、ジェットコースターにのっているようです。大平原や地平線が見える穀倉地帯の中西部とはちがって、どこでも山なみが見えて、日本的な風景で、森の木々もほとんど日本と同じように見えます。巨大な大木はどここの町や村に行っても大切にされていることがわかります。これらの木々の下は、夏の陽射しをさえぎって憩いと語らいの風が吹いています。

ここペンシルバニアは、アメリカ建国初期に、クエーカー（フレンス）、メノナイト、アーミツシユといった人たちがヨーロッパから信教の自由を求めて海を渡ってきた地であります。新世界という土地だけでなく宗教的な新天地でもありました。その雰囲気は今でもいきづいてる感じがするのペンシルバニアです。

2年前のアーミツシユ・スクールの銃撃事件で有名になったランカスターの町は、あれ以来、観

光客がどつと増えたとか。しかし、彼らアーミツシユはそれに関係なく暮らしていて、その暮らしは200年の間あまり変わってないように見えます。服装は当時のまま。女性は肌を見せないロングドレス。馬に曳かせた旧式の農耕具も100年くらい前の古いものに見えます。車社会になっても馬車で移動するのは変わらない。自動車だけでなく電気や電話を拒否した生活。アメリカに住んでいても母語はペンシルバニア・ダッチ（ドイツ語）。公立学校に子どもを通わせることはなく、自らのアーミツシユ・スクールで教育をします。

それを不思議な光景として見るのですが、考えてみれば、50年前の日本、50年前のアメリカ、50年前のアーミツシユのコミュニティ、それぞれにそんなに変わりはありません。まわりのアメリカや日本があまりにも変わりすぎたのだと思います。社会の変化が早過ぎて人間がそれについていけないのが現代の社会ではないでしょうか。とまあ、こんなことを思いながら、このところの3回の夏は同じような風景のなかで過ごしました。

滞在了したのは保守派メノナイトの家庭でした。メノナイトは、保守派、現代派、それに中間派とあって、それぞれ全くライフスタイルが違って、とても興味深いものです。日本には現代派メノナイトしか入ってきていませんが、宗教改革のときの再洗礼派のメノナイトはたいへんラディカルであったことに思いを馳せます。アーミツシユもここから分離したものです。

『アーミツシユの赦し』（亜紀書房）が今年の5月に日本語訳ができました。大変感動的な本です。全米ではベストセラーです。本屋のみならず、どこのスーパーマーケットにもありました。ぜひ読まれることをお勧めします。

## 再録

昭和60(1985)年1月号  
『おおやまと』第173号より

## 私の年賀状

柴地 則之

※平成元(1989)年9月24日帰幽・享年48歳

昭和六十年が明けて九日、日本山妙法寺山主の藤井日達上人が亡くなられた。明治十八(一八八五)年八月のお生まれというから、本年八月には満百歳の誕生日を迎えられるところであった。

「山高きが故に貴からず」とはよく言われる言葉であるが、人間も長生きしたから貴いというものではない。短い人生であってもその凝縮された生き方の中で山脈の最高峰に立つ人はいる。

けれども日達上人のように百歳に至るまで青年の日の理想を追求し、非暴力平和運動に徹した日本人を我々は知っているであろうか。

朝日新聞の「天声人語」に日達上人の三十五年前の言葉が引用されている。「文明とは電灯のつくことではない。原爆を製造することもない。人を殺さぬことである。」

現在この最も単純な原点が見失われている。二十年前大倭に、日達上人と中印国境問題でインドで共に行動した杉山龍丸氏が来られた。

杉山さんからガンジー翁の後継者の話、インドにおける日本山妙法寺の活動についてのお話を伺った。それが機縁となって杉山さんの『印度を歩いて』出版のお手伝いもさせて頂いた。杉山さんはその後、インドの緑化、砂漠の緑化問題に傾注され、近年実効が目に見えて上がってきたとの由である。(※昭和62年9月20日帰幽・享年68歳)

年頭に日達上人の訃報に接し、改めて二十年前の自分の姿を思い起こし、原点の大切さ、重さを感ずっている。

# あじさい日誌

9月11日 日本山妙法寺の平和祈念行脚のご縁で、宝塚市の僧侶、辻本侑宏さんが来邑されました。(7頁の再録を併せてお読み下さい)

9月13日 昇ちゃんは青山法義さんと映画「ウオンテッド」へ。お食事とショッピングもあったそうで大満足。後、「夢よ再び」と青山さん詣で……。

9月14日 裸会。「自分の宿命とは何か」をテーマに話し合われました。

9月15日 大倭神宮月次祭。  
9月19日 宿禰館の解体が始まりました。あじさい保育園は残されず。



9月20日 ドイツ・バンゲルグから当地で合気道を指導されている樋口寛さんが来邑。  
大倭病院では夜10時から3時

ごろまで高圧電線工事などが行われました。  
夕方より交流の家でFIWC定例委員会。

9月23日 大倭大本宮月次祭。この日は、昭和38年9月23日の法話を聞かせてもらいました。本紙9月号「宗教改革を私の宿命として」のタイトルで掲載したものです。

9月27日 介護の仕事をされている横浜市の前田節子さんが来邑。  
邑内の野良猫はちよつと困りもの。避妊手術を施す代わりに仲良くして!というボランティア活動をやる皆さんと縁が出来て、この日は2回目の共同作戦で、有志が雄ボス?を含む3匹を捕獲しました。地域猫という言葉もあるそう、猫のいる風景

も悪くないかも。多少の費用も必要、乞ご協力!  
10月4日 奈良パークホテルにて邑交流会。  
10月5日 肅々と雨具を用意してこられた27人(内子供2人)の参加者で馬場田の稲刈り。雨の中の稲刈りは初めてで、いつもより時間は掛かったものの、後はテントの下、椅子掛けにして恒例の宴会もできました。  
しかし翌日、やはり棹が倒れていて2カ所やり直しをしてくれたそうです。  
10月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑裸の会。  
10月9日 邑ではこのところどんぐりの落下盛ん。喜んで拾う子ども達を見かけます。  
大倭安宿死では  
9月17日 富雄南公民館主催の

## 第20回大倭会文化講演会

(共催：NPO法人むすびの家)

日時：平成20年11月8日(土)

午後2時より

場所：大倭紫陽花邑 拝殿

近鉄学園前南口より赤膚山行きバスで国際ゴルフ場下車、徒歩すぐ

講師：神谷文義さん

タイトル：交流(むすび)の家と私

【講師プロフィール】 1929年(昭和4年)愛知県平田生まれ。海軍の航空機製造会社に入社。B29による集中爆撃、東南海地震を体験する。昭和21年ハンセン病と診断され、昭和23年19歳、国により岡山県瀬戸内市にある国立療養所長島愛生園に強制隔離された。

※講演会終了後、大倭会館にて懇親会があります。(参加費用1,000円)

■問合せ：TEL 0742-44-0015 (大倭会)  
TEL 0742-44-0776 (むすびの家)

## 田んぼ通信

### 11月2日(日)

9時から田んぼで脱穀をした後、大倭会館で昼食。(こちらで用意いたします)

### 11月23日(日)

新しいお米で拝殿にお餅をお供えした後、12時より大倭会館で昼食会(赤飯)をします。

## 脱穀と収穫祭

### どうぞどなたでもご参加下さい

連絡先: TEL 0742-41-4615 (玄徳院)

に東老春の家へ。投句箱より「木漏れ日を浴びて色づく紅葉かな」「大いなる歴史を伺う萩の寺」  
俳句の風物  
上田森彦(98歳)柿むく手母のごとくに柿をむく  
西東三鬼 秋の夜ひとり柿をむいていると、ふつとおのれの指先が亡き母そっくりなのに気付く。深む秋は人の心にまでしみ込む。  
軒先で日々に黒ずむ巾着し柿

「みんなの介護・福祉講座」で32名が施設見学に来苑。  
(須加宮寮)  
9月10日 11日 13名が西浦温泉方面一泊旅行を楽しみました。  
9月12日 敬老のお祝い。75歳以上の住死者は半分以上の54名です。  
(菅原園)  
9月15日 十五夜の集い。月見パーティーを食べながら団欒の一時を過ごしました。  
(長曾根寮)  
9月14日 誕生会を兼ねて敬老の集い。ご馳走を頂いて、午後から演芸会をしました。  
9月26日 (デイサービス)おやつ作りは「おはぎ」。  
9月27日 (デイサービス)虹のキャラバン慰問の歌謡ショー。他施設からの参加もありました。  
(八重垣園)  
10月9日 外出支援。「元気になる食」と「健康体操」を聞き

## あんない

\* 月次祭(大倭神宮)  
11月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。  
\* 大倭会主催第四七九回裸会  
11月8日(土) 文化講演会として行われます。詳しくは左上欄をご覧ください。  
\* 月次祭(大倭神宮)  
11月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。  
\* 月次祭(大倭大本宮)  
11月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。